

# 畏友 渡部君の新刊 『中国人民解放軍の全貌』 を読んでの危機感

宮崎 泰樹 陸自78

私は、著者の渡部君とは、陸上自衛隊の同期・同職種(普通科)という間柄で、40年来の付き合いです。

彼は、若い頃から、国際情勢・軍事情勢に大きな関心をいただき、勉強を継続していました。が、中国人民解放軍の分析は、現役の頃から始めていたと思います。だが、本格的に取り組み始めたのは、自衛隊を退職してからではないでしょうか。

退職後の勉強量は半端でなく、好きなゴルフも封印したと聞きました。

2015年からハーバード大学アジアセンターにシニアフェローとして留学し、精力的に米国の軍人や研究者らと意見交換し、「日本のこれからの防衛の在り方」を基軸に、「中国・中国人民解放軍の研究」を深めたと推察されます。

その結果の一つが、米国滞在中に『米中戦争、その時日本は』(講談社現代新書)を発刊したことで、今回、米国の研究成果を更に盛り込み、2冊目の『中国人民解放軍の全貌』(扶桑社新書)の発刊に至ったのです。

今般、渡部氏2冊目の読書録を書いてほしいとの依頼が偕行編集からあり、本書への理解の一助になればと思いい、喜んでお引き受けしました。

「私には強い危機感がある」という出だしで、この本は始まります。

その危機感とは、「日本は、中国人民解放軍の脅威を正しく認識し、適切に対処しようとしているのか?」というもので、この本は、著者の危機感を、理路整然と、具体的に、努めて簡明に書かれています。

私は、今から約20年前に、中国の国防大臣(軍区司令官等3名同行)の訪日に約1週間同行しましたが、その中の上將の1人が、次のように発言したことが、今でも忘れられません。それは「我々中国人は、日本が中国で行った蛮行を決して忘れないし、絶対に許さない。我々が力をつけた際には、きつちりとお返しする」というものでした。そのようなことを考えているということを、日本人は肝に銘じなければなりません。

その中国が、中国人民解放軍が、いよいよ力をつけてきました。習近平中央軍事委員会主席は、「21世紀中葉には、世界一の強国を目指す」と宣言しています。

私は、著者の危機感に100%賛同

します。皆さんも、この危機感を共有しつつ本書を読み進めてください。

この本の構成は、極めてシンプルで、中国人民解放軍の戦略・作戦から始まり、基本的事項、習近平の軍大改革、陸軍、海軍、空軍、ロケット軍、戦略支援軍(宇宙、情報、サイバー等)、国防産業と科学技術、政治(世界進出)との絡み、最後に弱点を提示し、全11章にまとめています。

ただし、著者が「軍事改革が始まった2016年以前の人民解放軍の書籍は陳腐化している」と喝破しているように、この軍事改革に関する綿密な分析と、2018年の現時点における最新のデータが使用され、これに米国内2年間で得た米国のスペシャリスト等の意見交換や自身の分析等が満載しており、軍事知識が豊富で、中国や中国人民解放軍への関心が強い読者には必読の1冊と思います。

それでは、以下本書を読んで感じたこと、またそれに関する意見等を、3項目に絞り述べてみます。

## 中国国家戦略、軍事戦略、作戦

著者は、第1章に中国の戦略や作戦を一括してまとめ、わかりやすく、具体例を示して記述しており、難解な中国の国家・軍事戦略等が頭にスツと入ってきます。

先ず、最初に出てくるのが、習近平の夢で「偉大なる中華民族の復興」です。これは中国人にとっては殺し文句で、中華民族としての自尊心をくすぐり、鼓舞し、多少人権等が抑圧されようとも我慢しようと思う中国統治の麻薬であると思います。

この戦略の具現方法が、30年以上をかけて実施する「3段階発展戦略(三歩走)」として次に書かれています。

中国戦略の特色の一つ目がこの『長期戦略』であり、日本とは異なるところです。彼らは多少の時間のずれはあっても、これを着実に実行します。

日本周辺で言えば、現在問題化している尖閣・先島諸島・沖縄の第1列島線から、伊豆・小笠原諸島の第2列島線へいよいよ進出することになるが、2020年〜2035年にどこまで進出し、2050年の世界一流の軍隊になった際には、太平洋が如何なる状況になるかを、しっかりと考えながら読み進めてください。

本書では次に、「中国の国家目標とは、清朝最盛期の版図を念頭においた大中国帝国の再建」であり、中国には「領土とは力の増大よって膨らむ」という『戦略的辺境』という概念がある」と記述しています。この「戦略的辺境」が2つ目の特色であります。

これも極めて異質な概念で、力をつ

ければそこが辺境(国境)になるとい  
う概念です。先ずは「台湾」、その次  
は「先島諸島、沖縄」、最後にロシア  
が1860年の北京条約で伸介という  
姑息な手段で獲得した「沿海州」が焦  
点になるでしょう。ロシアとは今は仲  
が良いように見えますが、中国が世界  
最強に近づく頃には「沿海州」が両国  
最大の懸案事項になると予想されま  
す。

限戦「準軍事的手段を活用した戦争  
に至らない作戦」等がこれにあたりま  
す。

習近平のこの改革の本音は二つ、一  
つ目は「米国と戦うことができ、勝つ  
ことができる」。二つ目は「これまで  
解放軍を牛耳ってきた陸軍の力を削  
ぎ、原点である党の軍隊として、更に  
習近平自身が完全に掌握・統制できる  
軍隊にする」ことにあると推察されま  
す。

③米中戦争の発生、の3点に注目して  
います。そしてまとめとして、次のよ  
うに記述しています。  
「習近平の統治が2期目に入ってい  
るが、彼の統治スタイルは統制の強化  
である。その統制の強化が経済の大不  
振、国内の治安の悪化、国内の混乱か  
ら国民の目を転じさせるための対外的  
な強硬策の採用などにより諸外国との  
紛争に陥る可能性がある。最悪のシナ  
リオとして米中戦争が予想される。紛  
争や戦争において人民解放軍の本当の  
真価が問われる。最終的には米中の争  
いのために、習近平の夢は夢のまま終  
わってしまう可能性はある」

三つ目の特色は「台湾攻略への執念」  
です。1996年の台湾に向けた大規  
模演習時に、2個の空母打撃群が台湾  
の北と南に配置され、その結果この演  
習を中止した屈辱から、台湾を攻略す  
るには、「台湾周辺に米空母打撃群を  
絶対に入れない」のが必須の条件とな  
り、以来「臥薪嘗胆」の合言葉の下、  
真剣な軍拡が開始されました。

習者は、第3章習近平軍事改革の冒  
頭で「習近平は軍事に詳しい」と切り  
出し、本章の説明を始めます。これに  
は正直「あつ」と思いました。毛沢東  
や鄧小平は戦火をくぐり抜けており、  
それなりの軍経験があったものの、江  
沢民や胡錦濤はまったくの軍事素人  
で、軍の運用等に関しては、軍人達の  
言いなりだったと言われています。

この中でも、米軍に対抗するために  
私が最も注目しているのは、「軍種レ  
ベルの変更」で新設された「戦略支援  
部隊」です。これに関して著者は、「こ  
の部隊を称して、米国におけるヒュー  
ミントを担当する中央情報局、外国の  
通信・電波情報の収集や、サイバー戦  
を担当する国家安全保障局、国防省の  
軍事衛星担当組織、電子戦実施部隊を  
合体した化け物のような組織だと表現  
する者がいるが、言い得て妙である」  
と記述しています。

これが著者の見通しであり、「米中  
戦争」に関しては「米中戦争は、日中  
戦争にエスカレートする可能性が高  
く、日本は厳しい状況を覚悟すべし」  
と述べており、これこそが著者の最大  
の危機感ではないかと推察されます。

その観点から著者が示す解放軍の作  
戦を読めば、第1列島線、第2列島線、  
接近阻止・領域拒否等の台湾に関する  
作戦等が良く理解できると思っています。  
最後の特色は、「謀略」です。「兵は  
詭道(だますこと)」「戦わずして勝つ」  
は「存じの孫子の兵法です。中国では  
「謀略」がすべての戦略・作戦の根底  
にあり、謀略は最良の手段であるとい  
う認識が、日本とは全く異なるところ  
です。

しかし著者は「習近平は江沢民や胡  
錦濤とは違うぞ」と最初にくぎを刺し  
ました。習近平には、3年間の国防大  
臣の副官をはじめ、通算25年間の軍閥  
係ポストの経験があり、軍の表や裏の  
状況をしっかりと把握した上で、今回の  
軍事改革に取り組んでおり、いわゆる  
解放軍の壺を押さえた内容になってい  
ると言っても過言ではないでしょう。

これは孫子の言う「上兵は謀を伐つ  
(戦いにおいて最善の方法は、敵の企  
図・政戦略を無力化させること)」と  
いう最強の謀略総合部隊を育成しよう  
としているもので、米国にとって大き  
な脅威となるでしょう。

以上、「読書録」と称して、渡部氏  
の最新刊『中国人民解放軍の全貌』につ  
いて述べましたが、私も著者と同様の  
危機感を有しております。

「兵は詭道(だますこと)」「戦わずして勝つ」  
への変更に3点で、これは解放軍創  
設以来最大の改革であると思えます。

この改革の変更等を著者は実に平易  
に書いています。本書を読み進めてい  
ただければ、改革の全貌が理解してい  
ただけられると思えます。

中国の夢を阻む要因として、  
著者は、中国の夢を阻む要因として、  
①社会主義市場経済の根本的矛盾、  
②習近平の過剰な統制強化、

私はい、このまま解放軍の強大化が続  
くと、白村江の戦い、元寇に続く、第  
3の日本侵攻を考えなければならぬ  
時期に入ってきたとも思います。習  
近平が中華文明の復興を掲げるなら  
ば、我々も日本文明の復興を掲げて「武

本書に記載されている「三戦」「超

中国の夢を阻む要因として、  
著者は、中国の夢を阻む要因として、  
①社会主義市場経済の根本的矛盾、  
②習近平の過剰な統制強化、

私はい、このまま解放軍の強大化が続  
くと、白村江の戦い、元寇に続く、第  
3の日本侵攻を考えなければならぬ  
時期に入ってきたとも思います。習  
近平が中華文明の復興を掲げるなら  
ば、我々も日本文明の復興を掲げて「武

中国の夢を阻む要因として、  
著者は、中国の夢を阻む要因として、  
①社会主義市場経済の根本的矛盾、  
②習近平の過剰な統制強化、

中国の夢を阻む要因として、  
著者は、中国の夢を阻む要因として、  
①社会主義市場経済の根本的矛盾、  
②習近平の過剰な統制強化、

中国の夢を阻む要因として、  
著者は、中国の夢を阻む要因として、  
①社会主義市場経済の根本的矛盾、  
②習近平の過剰な統制強化、

中国の夢を阻む要因として、  
著者は、中国の夢を阻む要因として、  
①社会主義市場経済の根本的矛盾、  
②習近平の過剰な統制強化、

中国の夢を阻む要因として、  
著者は、中国の夢を阻む要因として、  
①社会主義市場経済の根本的矛盾、  
②習近平の過剰な統制強化、

中国の夢を阻む要因として、  
著者は、中国の夢を阻む要因として、  
①社会主義市場経済の根本的矛盾、  
②習近平の過剰な統制強化、

中国の夢を阻む要因として、  
著者は、中国の夢を阻む要因として、  
①社会主義市場経済の根本的矛盾、  
②習近平の過剰な統制強化、

中国の夢を阻む要因として、  
著者は、中国の夢を阻む要因として、  
①社会主義市場経済の根本的矛盾、  
②習近平の過剰な統制強化、

中国の夢を阻む要因として、  
著者は、中国の夢を阻む要因として、  
①社会主義市場経済の根本的矛盾、  
②習近平の過剰な統制強化、

の国日本」を取り戻さなければ、聖徳太子以来1500年以上も日本国が維持してきた対中スタンスが踏みにじられ、冊封・朝貢、属国化等を余儀なくされるのでは、との危機感をもっております。

どうか、著者の危機感を共有しつつ、『中国人民解放軍の全貌』を読んでいただき、急激な中国人解放軍の強大化とその全貌を知り、今後の日本国及び日本文明の防衛を考えていただければ幸いです。